

誰かをケアする

ドリス・レスリングのケアの精神と『よき隣人の日記』

金井 彩香

ドリス・レスリングの『よき隣人の日記』(*The Diary of A Good Neighbour*, 1983)は、差異をこえた共感的な人のつながりを描いている。レスリングがジェーン・ソマーズの筆名で発表した本作は、同名の主人公ジェーン(ジャンナ)が、偶然出会った貧しい老女モーディーの身の回りの世話をするという物語である。小川公代は『ケアの倫理とエンパワメント』のなかで、ヴァージニア・ウルフの言う「横臥者」と「直立人」という関係性に注目する。ウルフは、直立人が、横臥者にたいしてたびたび、「共感」とは区別される、「上から目線の同情」をしめすことを批判している。小川によれば、それはまた、社会的な弱者と強者の間にうまれがちな序列関係への批判でもあり、直立人には、横臥者にたいしての「同じ目線からの」想像力や共感をもつことが求められるのである(47-48)。ジャンナとモーディーの関係形成の物語は、この直立人と横臥者という序列関係の解体の過程に重なる。2人の関係は、身体的なケアをするものとケアされるものの関係であると同時に、中流階級のキャリアウーマンと労働者階級の貧しい老女との関係という2重の関係性をもつ。2人の間に構築されていく共感的なつながりは、同時に階級という序列の解体をも意味する。レスリングは、この小説において、横臥者と直立人双方を包容するような共感的な身体的ケアの関係をえがき、彼女自身が抱く、序列関係から解放されたケアするものとケアされるものの関係のありかたを提示している。

ジャンナは家族関係に失敗し、見知らぬ誰かとの新たな関係を求める。それは、従来の家族関係からはなれ、社会に自由で対等な関係を求めたレスリング自身の視点から導きだされるものであろう。5歳から30歳までを過ごしたアフリカの南ローデシアを故郷と感じていたレスリングは、植民地に住みながらも中流階級であることに固執する母と価値観を共有できなかった(Klein 47)。『よき隣人の日記』におけるジャンナの家族関係は、そんなレスリング自身の家族にたいする失敗を想起させるものである(Sprague 116)。家族から離れ、人道支援に目をむけるようになるレスリングの姿は、ジャンナが、病気の夫フレディや母との関係に失敗した自分の未熟さを恥じ、その代替のように偶然出会うモーディーを世話し関係を深めていくことに重なる。そしてそれは、ファビエンヌ・ブルジュールのいうところの、政治に介入された家庭の世界である「私的なこと」とは異なる空間でのより自由で対等な関係性とそこにうまれる「ケア」によって説明できるだろう。

ジャンナとモーディーの関係は、その「親密さ」によって支えられる。それは、「私的なこと」とは区別される、「ある弱さをもつ人びとの世界に、他の人びとが侵入しなければならない関係」である(ブルジュール 105)。植民地というイギリスの階級制度の外に育ったレスリングは、1949年のロンドンへの移住後も、社会的分断の向こう側にいる労働者たちの世界に居場所を見つけ、彼らにかつて心を寄せていた南ローデシア黒人たちの姿と重ね対等な関係性をもとめた。そうしたレスリングの姿勢が、この小説のなかの、ジャンナとモーディーに家族の枠組や差異をこえた親しい関係をもたらしていく。ジャンナはモーディーの貧しい家を訪れることから、「本流の社会(mainstream society)」のなかに存在する「見えない2次的世界(an unseen sub-world)」に気づいていくのである(Wallace 50)。

また、そうしたジャンナの気づきは同情的な正義が可視化されることによっても促されていく。たとえば、モーディーの家を訪れる電気屋のジムや医者たちの一見老人を気にかけているかのような態度には、「世の中の人がいつもいう」本音がある——“... *Why aren't they in a Home? Get them out of the way, out of sight, where young healthy people can't see them, can't have them on their minds!*” (32-33)。また、役所の「老人課」から来たこぎれいな服装のハーマイオニ・ウィットフィールドにはジャンナ自身の姿に重なるような、自己満足なふるまい——“*how well I am doing it! How attractive and kind I am ...* (49)”——がみられる。ジャンナはそうして、中流階級のものたちが、いかに労働者階級の人と「友だちにならないか」に気づくのである。社会の周縁にいる弱さをもつ人々の世界に気づいたジャンナによって、彼らをとりにくく一見思いやりに満ちているかのような「上から目線の」気遣いや、階級間の分断をまねく態度が露呈される。

家族関係に失敗した彼女自身が望んだとおり、ジャンナはモーディーの世話をすることによって多くを学ぶ。Elizabeth Maslen が指摘するように、モーディーとの出会いはジャンナに人間としての成長をもたらす(58)。当初、モーディーの汚れた家に戸惑い、嫌悪感を抱いていたジャンナは、徐々にモーディーの世界にはいり共感を深めていく。ジャンナがモーディーの体を洗う場面はそれを象徴的に示すものであろう。モーディーの私的領域を共有したジャンナは、横臥者が直立人の同情に抱く苦しみを知る——“*I washed her private parts, and*

thought about that phrase for the first time: for she was suffering most terribly because this stranger was invading her privateness” (60)。かつて見えない隣人であったモーディーの世界との関わりをとおしたジャンナの成長は、2人のあいだに親密さと共感をともなう関係を形成していく。

そうして形成されるジャンナとモーディーの関係は、相互的かつ持続可能性をはらむものとして描かれている。Joan C. Tronto は、人間の自律性の不完全さと相互依存性を強調する——“Throughout our lives, all of us go through varying degrees of dependence and independence, of autonomy and vulnerability” (135)。ジャンナとモーディーの関係の対等さは、ジャンナの「書くこと」によって保たれる。ジャンナは、モーディーの世話をしながら、モーディーが語る過去の物語を雑誌記事や小説に書いていく。そして、最終的に、小説を出版することで経済的な利益をえる (Port 30)。一方で、ジャンナの小説はモーディーにとって人生の再生を意味する——“Maudie would love her life, as reconstructed by me” (252)。ジャンナは、モーディーと自身の双方にとって平等で有益な産物として小説を残すのである。物語は、ジャンナがモーディーの葬儀から帰宅し、姪のジルがジャンナのためにお茶をいれに行く場面で終わる。ここに Josna Rege が指摘するレッシングの理想——“one of intergenerational exchange that fosters mutual and concerted growth” (4)——をみることができるだろう。ジャンナにとってのモーディーは、たびたび「加齢、死、老衰への恐怖」を象徴する存在として議論されてきたが (Watkins 77)、モーディーの看病を終えたばかりのジャンナへの姪ジルの気遣いは、相互的な関係性が引き継がれる明るい未来を示唆するものである。モーディーの言葉——“You’ve helped me, and now I’ll help You” (260)——に示されるような「ケア」の関係は、次世代へと続いていくのである。

『よき隣人の日記』の物語をとおして形成されるジャンナとモーディーの関係は、レッシングが社会の周縁にいる人々へむけてきた共感的で無差別なケアの視点により描かれている。レッシング自身同様、家族関係に失敗するジャンナは、徐々に弱き隣人への共感をえて成長し、「親密さ」による対等な関係性を築く。それは、小川の指摘する「横臥者」のより優れた感性や想像力を想起させるような、双方にとって豊かで生産的な関係性とも重なる。レッシングは、「私的なもの」と「一般的なもの」を同一視する作家としての自身の姿勢についてたびたび言及している——“Writing about oneself, one is writing about others, since your problems, pains, pleasures, emotions—and your extraordinary and remarkable ideas—can’t be yours alone. . . (The Golden Notebook 13)。レッシングの社会的他者にむける視点は、「自分」と「誰か」のあいだに無差別さをもつ。レッシングのリアリズム小説の多くがシンプルなメッセージ性をもっているように、『よき隣人の日記』もまた老いをめぐる女性の問題を率直に描いている。しかし、この小説に描かれる、分断された社会の弱者と強者が「序列関係」から解放された共感的な人間の関係性をえていく過程は、レッシングが社会の弱さをもつ人々への向けてきた「ケア」の視点を表象するものといえよう。

引用文献

- Klein, Carole. *Doris Lessing: A Biography*. Carroll & Graf Publishers, 2000.
- Lessing, Doris. *The Diary of A Good Neighbour. The Diary of Jane Somers*, Michael Joseph, 1984, pp. 11–261.
- . *The Golden Notebook*. Fourth Estate, 2014.
- . “A Talk with Doris Lessing by Florence Howe.” *A Small Personal Voice*, Alfred A. Knopf, 1974, pp. 77–82.
- Maslen, Elizabeth. *Doris Lessing*. 2nd ed., Northcote House Publishers, 2014.
- Port, Cynthia. “‘None of It Adds Up’: Economies of Aging in *The Diary of a Good Neighbour*.” *Doris Lessing Studies*, vol. 24, 2004, pp. 30–35.
- Rege, Josna. “The Child Is Mother of the Woman: Exchanges between Age and Youth in Doris Lessing.” *Doris Lessing Studies*, vol. 24, 2004, pp. 3–7.
- Sprague, Claire. “Mothers and Daughters/ Aging and Dying.” *Rereading Doris Lessing: Narrative Patterns of Doubling and Repetition*, 1987, pp. 108–28.
- Tronto, Joan C. *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*. Routledge, 1993.
- Wallace, Diana. “Women’s Time’: Women, Age, and Intergenerational Relations in Doris Lessing’s *The Diaries of Jane Somers*.” *Studies in the Literary Imagination*, vol. 39, no. 2, 2006, pp. 43–59.
- Watkins, Susan. “The ‘Jane Somers’ Hoax: Aging, Gender and the Literary Marketplace.” *Doris Lessing: Border Crossings, Continuum*, 2009, pp. 75–91.
- 小川公代. 『ケアの倫理とエンパワメント』. 講談社, 2021.
- ブルジェール, ファビエンヌ. 『ケアの倫理——ネオリベラリズムへの反論』. 原山哲他訳, 白水社, 2014.